

氏名（本籍）	植田 理子
学位の種類	博士（文学）
学位記番号	博 乙 第 2988 号
学位授与年月日	令和 3 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	泉鏡花の文学における演劇性の展開

主	査	筑波大学	教授	博士（人文科学）	清登 典子
副	査	筑波大学	教授	博士（文学）	谷口 孝介
副	査	筑波大学	准教授	博士（文学）	馬場 美佳
副	査	筑波大学	准教授	博士（学術）	吉森 佳奈子
副	査	昭和女子大学	教授	文学修士	吉田 昌志

## 論文の要旨

本論文は、泉鏡花について、同時代の演劇の影響を受けながら培われた文学という視座から、小説、脚本、戯曲が生成されていく創作状況を照射し、実態を明らかにすることによって、その文学の演劇的側面の本質に迫ることを企図したものである。

本論文の構成は、以下の通りである。

### 序論

#### 第一部 文学のなかの演劇——明治三十年代の小説を視座として——

##### 第一章 声の文学の演劇性——「湯女の魂」論——

##### 第二章 演じる姿を描く——「舞の袖」論——

##### 第三章 長編小説の方法——河竹黙阿弥「黄門記童幼講釈」と「風流線」の対比から——

#### 第二部 小説の上演と戯曲の成立

##### 第四章 小説上演のはじまり——明治三十年代における「瀧の白糸」と「辰巳巷談」上演を中心に——

##### 第五章 小説から戯曲へ——「深沙大王」の成立——

##### 第六章 舞台上演と小説の交差——「白鷺」の初演——

#### 第三部 演劇生成の場と鏡花の文学——大正期の上演をめぐる——

##### 第七章 書き換えにおける鏡花の位置——「深沙大王」の上演——

##### 第八章 舞台の表現と鏡花の文学——『囃子日本橋』の成立——

### 結論

序論では、当該研究の問題意識と議論の方向性について述べられている。泉鏡花の演劇をめぐるのは、近代戯曲の観点から「天守物語」を達成とする戦後の評価が広く行われ、それと同時に西洋戯曲の影響が重視されてきた。だが、鏡花が生きた時代にそって演劇との関係のなかで捉え返すことで、まったく異なる事態が浮かび上がるのではないかとする。そして、鏡花の文学が喚起する演劇的側面、さらには上演による表現を、とも

に議論していくために「演劇性」という概念を用いて論じることを提起している。

第一部では戯曲執筆以前の鏡花の小説における演劇性について論じる。第一章では鏡花自身が講談を演じた体験に着目している。文学者による講談会において、小説「蝙蝠物語」を講談「湯女の魂」として演じ、その口演筆記が改稿を経て雑誌『新小説』に〈読み物〉として掲載されていく変化の過程を追う。この際、台詞から成る演劇的表現に近づき、また知覚に訴える怪異を描くことが目指され、語る声を介した創作に鏡花の演劇性の原点が求められるのではないかと指摘している。第二章では、女役者・市川九女八が怪異の演技の助言を鏡花にもとめていたことに着目し、演じる役者そのものの主体性・身体性に目が向けられ「舞の袖」が書かれていることを、同時代小説の描く女役者の「狂乱」の演技との比較から明らかにしている。第三章では長編小説「風流線」「続風流線」における河竹黙阿弥の歌舞伎「黄門記幼童講釈」の受容を軸に論じ、とくに登場人物の造形、場面設定、謡曲の取り入れ方の分析から、それらを本作が柔軟に使いこなしている様子を明らかにし、鏡花における文学と演劇の境界が、創作上、当初曖昧なものであったことを指摘する。

第二部では、小説が新派によって上演されるようになった明治三十年代から四十年代にかけて、舞台の表現と文学の表現に対する鏡花の意識を探っている。第四章では、主に「瀧の白糸」・「辰巳巷談」の上演の特徴を考察し、〈原作らしさ〉が模索されはじめた時代のなか新派の上演に直接関係したことで、鏡花が舞台と文学の表現の問題に向き合うことになったとする。第五章では、上演が目指されながらも頓挫した新派からの依頼脚本「深沙大王」について、鏡花最初の戯曲創作の意義を、怪異への志向とともに探る。小説「水鶏の里」を劇場関係者と共同で「ふるやしろ」という一場に変え、さらに鏡花が全幕書き下ろしたのが本脚本であった。観客が演者の演技によって幻を共有するという方法で異界を立ち上げようとしたとし、怪異を自明とする空間を舞台の上に獲得したことが鏡花戯曲を生成させたとも指摘する。第六章では、新聞連載小説「白鷺」をとりあげ、初演台本等において台詞・ト書き部分が原作小説通りでも上演可能であったことを確認し、とくに小説の「回舞台」の章は上演されてはじめてその効果が現れる点に特徴があるとする。小説「白鷺」は読者に舞台を見るような視点を提示しており、いわば鏡花のなかに小説・戯曲という区分では分けられない作品世界が登場し、舞台のような物語の空間を小説のなかに構想したのではないかと論じている。

第三部では、大正前期の鏡花が、本格的に、劇の生成の具体的な場に立ち会っていくことで達成したものについて、そしてそれが従来の近代的戯曲観といかに異なるかについて論じている。第七章では、再度「深沙大王」に及ぶ。本作がようやく上演に至ったとき、脚本執筆当初とは状況が大きく変化していたことを示し、鏡花があらためて「深沙大王」に自ら筆を入れたことに注目している。その際の書き入れ本の分析を通じて、鏡花が配役を変え、俳優の役柄に応じて脚本を改めていること、なにより変化する状況から積極的に自らの作品世界への示唆を得て内容を深めようとしている点を明らかにしている。オリジナリティを原則とする近代的な感覚とは異なり、むしろ相互作用のなかで生み出されるものもまた自身の文学だと認識する鏡花のありようを評価している。最終第八章では小説『日本橋』の新派上演台本（座付作者、俳優らとの共同制作）をもとにした『舞日本橋』をとりあげ、小説のことばをできるだけ採用するという従来の単純な台本化から、俳優の台詞回し、仕草、舞台照明など現実の舞台を再現するものへと変化したと論じ、鏡花が舞台の上で物語を展開させる方法を獲得し戯曲の表現とするに至った達成の軌跡を描く。そして、本戯曲を鏡花の文学と演劇の関係において、ひとつの頂点を成した作品として位置づけている。

結論では、以上の各論を再度概観した上で、あらためて鏡花の文学と演劇とのかかわりを意味づけ、今なお演じられ続けることの意義を、現実の舞台と切り結ぶことで成立した鏡花の演劇性に求めている。

## 審査の要旨

### 1 批評

まず本論文は、泉鏡花研究においてもっとも立ち遅れていた演劇の分野に本格的に鋏を入れたものであり、その意義は大変大きいものといえる。しかも論及が少なかった作品について演劇性の観点から捉え直し、また著名な作品については舞台化の実態に踏み込んで上演の具体的な様相を明らかにしようとしている点が高く評価される。

そして、従来自明視されてきた「鏡花の文学が演劇的であること」にまず疑義を呈し、問い直すことから研究がはじめられていることも画期的である。これにより、そもそも鏡花の演劇的なる特質とは何か、という根本的な問題が検討される道を拓いている。そしてこのことを論じるに当たり、小説か戯曲かといった二分法ではなく、鏡花の創作の本質を捉えるために「演劇性」という概念が用いられ、結果、近代性を前提とした単線的な議論から自由になり得ている。

また注目されるのは、実に多様な資料を有効に活用していることである。鏡花には多くの一次資料が残されているが、草稿や原稿を精査した上での実証性が本論文に厚みを与えていることは間違いない。なかでも上演という一回性が生命とも言える新派劇について、数少ない一次資料を求め調査していく探究態度は、本論文に確たる基盤を与えている。加えるに、そうした資料から適切かつ複雑な情報を見出す能力も秀でており、ゲラや、台本、書き抜きといった取り扱いが難しい断片的な資料についても、位置づけを行った上で詳細な分析と考察を加えており、その方法と態度は後進の範となるものといえる。

各章においては基本的に1章1作を中心に扱うことで立論する方法が採用され、それぞれの作品のはらむ問題性に合わせたアプローチが行われていることも本論文の特徴といえる。最適な分析方法を検討しつつ論じていく態度は、堅実で説得的である。そしていずれも、従来の研究にはない新しい試みとなっており、導かれる結論も独創的なものとなっている。

ただし、ひとつひとつの研究対象に則した方法の選択は、一方で全体としての統一性を犠牲にしかねない面があり、本論文の議論を包括する「演劇性」という概念を今後鍛え上げることによって、さらなる総合的な視点を獲得することが求められる。だがこの点は、今回の成果の上に立って改めて論じられるべき課題と捉えられるものであり、本論文の価値をいささかも損なうものではない。日本近代文学史のみならず、日本近代演劇史にも及ぶ、複数の領域にまたがる超域的な研究は、泉鏡花研究のみならず、今後の人文系の学問に求められるものとしてますます重要であり、本論文が学界に広く寄与することは確実であると考えられる。

### 2 最終試験

令和3年1月21日、人文社会科学研究所学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。審議の結果、審査委員全員によって合格と判定された。なお、学力の確認は、著者が「人文社会科学研究所論文審査等実施細則」第10条(3)に該当することから免除した。

### 3 結論

上記の論文審査並びに最終試験の結果に基づき、著者は博士(文学)の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。